

京大天皇事件 学生時代のこと（97・5・21）

倉野 昌 夫（昭23・理）

はじめに

倉野で御座います。以前六年間ほど東京に住みましたが、一時期地方に勤め、今度は単身赴任でまいりまして、およそ五年になります。三高卒業は昭和二十三年、入学は昭和二十年の戦争末期に動員の現場で致しました。正式に三高へ戻ったのは昭和二十年の九月だったと思います。（このことは神陵文庫第十五巻に小谷君が書いています）そのような次第で、三高の教室で授業を受けたのは二年半で御座います。本日は安部さんに強引に説得されて参りましたが、私は内弁慶で話し下手のため非常に緊張しております。お聞き苦しい点がありましたらご容赦頂きたいと思います。

今お話のありました昭和二十六年の京大天皇事件について、事件の現場に居合せた方以外で、御記憶になっておられる方は少ないのではないでしょうか。大先輩の前で話す程の内

容ではないかもしれませんが、事件の渦中にいたものとして、巻込まれた体験を主にして話を進めてゆきたいと思います。先ずその伏線として私の略歴を少々お話しさせて頂きます。

京都大学自治会の中央執行委員になる

私は今申上げましたように昭和二十年に入学致しましたが、三高と海軍経理学校を受験致しまして、一月の終りに二つの合格通知が殆ど同時に参りました。その一週間程前に父親を亡くしたという事情が御座いましたので、いきなり海軍経理学校をお断りして三高に入ることに決めました。このことについて警察署から何回か調査に来られ、時節柄非常に決意を要することでした。私の家は宮津の更に田舎の方で、夫を亡くした母親が息子を京都に出すということは極めて困難な情況で御座いましたので、一時は止めようかとも考えましたけれども、折角合格したのだから何とか頑張るということになりました。そういうことですから、私のその二年半の京都生活の間、私の母親は「担ぎ屋」などをして、大体一週間に一度か二度のピッチで、米やら魚やらの重い荷物を背負って田舎から京都まで運び、私の所へ供給する傍ら、それらの品物を知人に買上げて頂いて、それが学資の足しになったという経緯が御座います。時々警察に捕まりまして、教室に連絡がありますと、私

が二条駅を管轄する警察署の方に母をもらい下げに行ったことも、今では懐しい思い出になっております。こうして、二三年に三高を卒業致しました。更に大学へ進むという意欲は勿論ありましたけれど、こんな家庭の状態でしたので、それはとても難しいという考えのもとにその意欲は喪失しつつ、しょっちゅう田舎に帰っておりました。結局、受験準備もあやふやになりました、最初の受験は勿論失敗でした。しかし、そのために浪人するのではなく就職することになりました。最初田舎で中学の教師を半年位しておりましたけれども、その後東京に出て小さな建築屋に就職し、生涯そこに勤務し続ける心算でおりましたところ、ところが丁度二年位経った頃でした。昭和二五年に旧制高等学校がなくなる、その時点で全国で二千余りの白線浪人がいることが文部省で問題になり、この際、新制大学二年に臨時編入を認めるということになりました。臨時編入試験は全国の各旧帝国大学で受験はできるけれども、希望は何処の大学でもよろしい、第一志望、第二志望、第三志望位まで取上げて、二千人余を収容したい、そういう相当大掛りな特別措置が行われることになりました。そのニュースを勤めていた会社の社長が知って、学資は援助するから是非受験しろと言われ、東大を受験場に選んで東大を受験しました。こうして京大の工学部の電気工学科に入りましたが、社長は建築科を条件としておられましたので、援助の話は消えました。けれども、その時にはこちらでもアルバイトをしてでもと思っておりましたから、その心算

で入学を致しました。

新制大学は既にその一年前に発足しておりまして、正規に入学した者は勿論一年生に入り、四年で卒業するわけですが、臨時編入者はその二年のクラスに編入され、三年で卒業する課程になっていました。御存知かと思いますが、当時の京大は、最初の一年半は教養課程として宇治分校と吉田分校で勉強することになっていて、三高が吉田分校になっていました。臨時編入で電気工学科に入学した八名で、二名が三高出身者でした。最初の半年間は吉田分校で教養課程をということ、その二人はまた三高の先生に教わることになりました。我々にとってこれは大問題でした。他の六人は大して違和感はないようでしたが、二人は三高の教授と再びまみえることになり、まかり間違えば落第もしかねない？。これは何としても回避したい。そこで、旧制高校の課程を経ている臨時編入者は全員、教養課程を終了していると認めて頂きたいということを、電気工学科の教室にお願いすることになりました、私がその折衝役になったわけです。そうなりますとこちらも責任重大ですからなりふり構わず、工学部や教養学部の事務室、そして教授のところ等色々な所に足を運び、授業そっちのけで頑張りました、とうとう目的を達成しました。もともと、臨時編入学生分校で教養課程を学ぶのは電気工学科のみで全学的な措置ではなかったのです。斯くして他学部の『臨編』と同様、専門講座のいくつかは、入学当初に三年生と同席で受講する

ことになりました。

ここまでは無事に運びましたが、この活躍が結局私にとってはあだになりました。京都大学には同学会と称する全学自治会があり、代議員が全部で三百名位いたと思います。それを各学部で選出するのが、お前は臨時編入学生の中で非常に活躍したから、同学会の委員に適任ではないかということでみんなが推薦しまして、いやいやながら結局同学会の代議員に選出されてしまいました。同学会には中央執行委員が八名いるのですが、なにをするのか同学会の性格も分からないままに、余勢を駆って中央執行委員に選出されてしまったのです。

昭和二六年の新学期の頃は、その二・三年前に「聞けわだつみの声」のような戦没学徒の手記が非常に注目されていた世相でもありまして、当時、京大のみならず全国の大学の学生達は、戦争に対する反対を掲げ、再び戦争に駆り立てるなという叫びが、学内に満ち溢れつつあったのではないかと思います。勿論、ノンポリ学生も多かったかもしれませんが、少なくとも同学会のなかでは、会議の席に戦争反対、そのためにはどのような運動をするかということが様々な形で論議されておりました。その動きのなかで、京都大学で原水爆展をやるとうという運動が起りまして、中央執行委員の一人がその推進者になりました。大学と交渉の結果学内でやることはまかりならぬということになったのだらうと思うので

すが、学外にその会場を求めて奔走しましたところ、京都駅前今は近鉄デパートになっております当時の丸物が、それを引受けてくれるということで、そこに会場を設営して、日本で、いや世界で始めての原水爆展をかなり大掛りにやりました。広島、長崎の色々な資料、沢山の手記や遺品など数多くの展示品が、原爆にあわれた方の家族や遺族の方からお借りするなどして揃いました。同時に当時、原爆画「原爆絵図」全体も、展示させて頂くことができました。これが評価を高めた面もありまして、昭和二六年の七月頃、大成功裡にその幕を閉じることができました。

天皇事件の発生

原爆展は戦争反対という学生の気持ちを表す運動の一つだったのですが、その実施は昭和二六年のことでした。ところで、恐らく二五年頃から昭和天皇の全国行脚が始ったのではないかと思いますが、だんだん世の中が落着いて参りまして、昭和天皇も戦争中に痛手を受けた国民の慰労といえますか、激励といえますかそういった目的で、人間天皇のお披露目の意図もあつてでしょうか、全国をお訪ねになることが次第に実行されるようになりました。こうして二六年の十一月に京都府下に巡幸されることになり、その最初の日、それは忘れもしません十一月十二日に京都大学へ行幸されるということが決定しました。大

学は、天皇をお迎えするのであるから、この際きれいな本部の中でお迎えしようということとで、時計台のあります本館を、外部はともかくとして内装は全部塗り替えるといったリニューアルの工事が進んでおりました。同学会では大学側とは別に、天皇がお見えになるまたとない貴重な機会に法学部、経済学部その他の大教室、或は理工系の実験室、研究室、貧しい実験道具で実験している様子等も見えて頂き、さらには直接学生にも接して頂いてはという意見が出ました。大学側にそのような申入れをしたのですが、これは勿論拒否されました。それならば、天皇に対して質問状を出させて欲しいという意見が現れて来まして問題は次第に紛糾してまいりました。政治に係わりのない天皇に、平和をどう思うかとか、再軍備に対して反対の意見を持っているかとか、拒否権を発動されますかとか、そういった質問状なんでもつてのほかであるという主張もありましたが、結局政治的項目を盛込んだ公開質問状が作られました。これは勿論大学に受入れられず、質問状は同学会の掲示板や立看板に展示するデモンストレーションに終わったわけです。こうして大学と同学会の間にかなりぎくしゃくした空気が含まれたまま十一月十二日がやってきました。

前々から、大学からは当日は天皇をお迎えするのに非礼があつてはいけない、学生達ばかりとした服装で、十一月十二日一時過ぎに正門前に集合して整然と盛大にお迎えして欲しいという掲示が出ていたと思います。

一寸余談になりますけれども、同じ年の昭和二六年の四月一日に東大へ天皇が行幸されたことが御座います。戦後第一回の医学会の総会があつて、安田講堂での開会式典に天皇が御臨席になるということで、同じような掲示が東大で出たそうです。学生がそれを無視したかどうかは知りませんが、さほど多数の学生は集らなかったということも聞いておりましたので、京大でも余り多くの学生は集らないのじゃあないかなとも思っております。私自身は真面目な？学生でしたから、当日は朝から一日掛りの実験を予定していました。従つてお迎えには行けない状態ですつと実験室におりました。ところが、一時が近付きますと仲間は落着かなくなりました。天皇をお迎えに行こうと誘い合い全部出て行つてしまいました。

二時半にお迎えの行事が済んで、どやどやと帰つてきた連中は、みんな様に興奮した表情をしていました。それでも、そのときは大変なこととは思わなかつたのです。後で聞いた話で私は現場におりませんでしたので、事実と違ふところがあるかもしれません。本館前に千人余りが集合し、それを整備する学生が何人かおりました、天皇の車が通り易いように道路から正門前を開けておりました。そこへ天皇の車が入つて来ました。とたんに皆がスターを見たいような心理作用でわつと集り、天皇の車を取囲んで動けなくしてしまつたらしいのです。後の方の者は見えないから肩車をしたり、御存知のように京大の正門

の中には松が沢山あります。その松の木に登る者がいたり、大勢登り過ぎてその松が倒れたりしたのもあったそうです。そういう事態にこれは大変だということで、教授、用務員が総出で整理して、何とか車を玄關まで迎え入れるように努力したそうです。その折しも随行して来た新聞社の宣伝カーが、君が代を演奏し始めたのです。君が代について、今もそういう気配が多少あると思うのですが、当時の学生にとっては非常に忌避すべきものであったのです。君が代、日の丸は国歌、国旗ではない。これは戦争で亡くなっていた先輩の思い出に繋がるもので、平和を標榜する国のシンボルではないというような意識が働いている時代でしたので、集った学生の中から期せずして当時流行っておりました『平和の歌』が歌い出され、それが盛り上がって大合唱になった。そういう状況を帰ってきた皆が報告してくれました。それは素晴しかつたということで皆興奮していたわけですが、これその後大変な事件に発展していったわけです。

翌一三日の新聞、全国紙がこぞって京大の天皇事件のこと、(天皇事件という呼称はまだなかったと思います。)天皇の行幸の車を阻止し、車を取り囲んで労働歌を歌って、大騒動になったということを書立てました。中には天皇の車、鹵簿の上に何人か飛乗って地団駄を踏んだとか、無かつたことまで見てきたように書いた記事も出ていたそうです。

天皇は本部の中で一時間程教授方のご進講を受けられて、お帰りになる時には導入され

た数十名の警官が整理をしてお車を誘導したと聞きました。この出来事が発端になりました。それから新聞には毎日のように、文部省の見解、警察庁の意見、或は内閣がどう思っているのか、処分は免れないだろうとか、色んな意見が交錯しておりました。そうしたなかで、大学側は世間の目もさることながら、大学としての意見をまとめ、処置もしなくてはいけないということで、確か、京大の施設になっておりました西園寺さんの別邸が今出川かどこかにあったと思うのですけれども、そこに各学部の補導教授が一週間程籠り切って補導会議を開いて処分について協議されました。

スケープゴートにされる

私はその後一週間程別にさしたる事もなく過ごしました。そんなある日、仲間四人で徹夜の麻雀を楽しんでおりました。その仲間達が、同学会の執行委員は多分停学か退学は免れぬだろうと冗談のように言うのに対し、そんな馬鹿なことがあるかと一笑に付しながら一晚過し、そのままその友達の下宿に泊っていました。早朝、教室へ出掛けて行った一人が、あたふたと戻って参りました。たたき起こしてくれました。掲示板に君の名前が出ている、無期停学が八名つまり中央執行委員八名が全員無期停学、そういう掲示板である。ご丁寧にも掲示板から掲示をはがし、その実物を持って来て見せてくれました。私はすぐ

に大学に駆付け、工学部の電気教室、そして事務室へ行きましたが、今日から君は学校へ来なくてもよろしい。ということと言渡されました。大学へ来るなということは将来どうなるのですかと尋ねますと、将来のことは分かん、兎に角「無期」だから沙汰は追って待て、それまで学校へ顔を出すことは一切まかりならんという厳しいお達しでした。

下宿へ戻るのもいやな気分で、学生食堂で食事をしていました。その学生食堂の隣の部屋に京大男声合唱団という看板が掛っておりまして、そこからピアノの音と歌声が聞えていたので、空虚な心のままにふらふらと入って行きました。私はもともと音楽が好きで、それに引入られたわけですが、偶々そこで練習していた何人かの仲間に、こういうことで今日から大学へ来るなど言われたけれど、下宿でただじっとしているわけにはいかない。せめてもの気晴しに仲間に入れてくれないかと言いましたら、それは歓迎だということ、合唱の道にその頃からのめり込むことになってしまいました。これは余談で御座いますけれど、先程安部さんからご紹介を頂いた「歌好き」の生活はその辺りから発しております。時が経つにつれ、「停学」ということが如何に重大な問題であるかということが、段々分って参りました。京都におりますと下宿の場所は知られておりますから、全国あらゆるところ、右翼、或は暴力団のような思いがけないところから、色んな手紙やら投書やらが参りまして、天皇に非礼を働いたような非国民は殺してやるというようなことを書いたも

のまでありました。一方田舎で一人暮しの母親の様子を聞きますと、天皇がその後引続いて郡部の方を回っておられる最中でしたので、あそこの息子がこういうことだということになりますと、それこそ外へも出られないという状態で、ひっそりうちの中に引きこもっているということも聞えて参りました。しかし、田舎へ帰るわけにもいきませんので、東京のもと勤めた会社に行きましたところ、社長が拾ってくれました。退学になったら退学になったでいいじゃないか、会社に戻ったつもりで勤めてくれよと、有難い言葉で無事にそこに再就職致しました。それが十一月の終りでした。十二月を過ぎ、大晦日を過ぎてもずっとそこにおりました。

ところが、ここで非常に感激した一つの事件がありました。三高時代の私のクラスは化学の加古先生が担任だったので、加古先生が中心となって、三高の仲間、同級生や先輩が京大の先生方に、それも三高出身の教授方に私の苦境を話してくれまして、遂に当時の総長、服部総長（大3・三医、医学部）にまで話が届きました。もともと私以外の七名にもそれぞれ問題があったかもしれませんが、私の場合、私が東京に逼塞しているということ、田舎の方でおふくろが非常にピンチになっていることを極めて重要な問題として取上げて頂いたのです。それで、正月の休みに、まさに冬休みの最中でしたけれども、わざわざ学生課長だったか学生部長でしたかと同道で、あの頃のこと、しゅっしゅっぽっ

ぼの汽車の煙にむせながら、山陰線、宮津線と乗継いで、田舎の村まで足を運んで頂きました。石川村といいますが、当時まだ町村合併の前で、三千人位の小さな村でしたけれど、村長が高知高校から京大法学部出身、たった一人だけいた村の医者が富山高校から京大医学部出身の人でした。このように京大出身が村長であり、医者もそうでしたから、京大の総長が来るということは、それこそ昭和天皇が来られたとき程の騒ぎになったらしく、二人が中心になって、主だった人達を公民館に集め、京大総長のお話を聞くということになりました。

世間の色んな騒ぎからすると、誰かを処分しなければならなかったのはやむを得ない。だからといって集った千人余の学生を一人一人糺して、非礼があつたかどうか、確認して非礼のあつたものを処分するということは不可能。処分するならば自治会、同学会の代議員全員では多過ぎる。執行委員八名、これがもう最良の手段であつた。従つて執行委員八名が天皇の前に立ちほだかつて非礼を働いたというのではない、全体の責任者とみなし、教育的措置として停学処分を行った。更には自治会である「同学会」は解散させたという経緯を説明されたそうです。この話を聞いた村人の全員が納得したかどうかは分かりませんけれども、村の人達の気分を少なからず納めて頂いたということで御座います。後になつて分つたのですけれども、服部総長がポケットマネーだから気にするなと言って、私の

母親に十万円手渡しして、帰って行かれたのでした。昭和二七年当時ですから恐らく大学卒業の初任給は三千円かそんな程度だったと思いますので、吃驚するような大金でした。こうしたこともあって非常に厳しい村の雰囲気が段々に解消されていったということは確かです。

その後の学生運動では、一人でも処分しますと全学が騒ぎ立て、学校の方も処分なんか出来ない雰囲気になっていくわけですが、私が処分を受けた頃は、学生の誰かが処分されればしゅんとおとなしくなってしまうというのが大方の状況であつたと思います。

その頃、やはり何処から消息を伝え聞いて、東京におります私のところへ、尋ねて来る人がありました。そのなかの一つ、早稲田大学の自治会の方が来られたことがありました。早稲田大学でその一年位前に、今早稲田大学で不穏な動きがあるという誤報が警察に届き、直ちに警官が学内に乱入して来て、昼休みに学内広場で休んでおつた学生が何も分らぬうちにぶん殴られ、誰彼となく引立てられて行ったという事件があり、当時の総長が激怒されて警察に嚴重な抗議を申込まれたという事件がありました。早稲田大学でこのようなことが二度とあっては困る、京大の天皇事件で貴方の受けた不当な処分のことを聞いて同情している、この事件のことを是非自治会で話して欲しいと言われました。お断りしたのですけれど、なかなか聞いてもらえなくてとうとう引っぱり出され、自治会の何十人

かの前で京大事件の真相を話し、京大当局からこういう形で「教育的な処置」を受けたという説明をしたことも御座います。

また、丁度その頃、全国の全学連の会合が東京でありました。今度は全学連の委員が参りまして、確か王子の方の会場だったと記憶します。警察にも何処にも内緒の会合だが是非来て欲しいということで無理失理に拉致されました。その時、男ばかり固まって行つては目立つので、女子学生を五六人派遣するから女子学生と一緒に来てくれということで、女性と連れだつて肩を組んだり手を繋いだりして行き、会場では京大の天皇事件の説明を求められました。

その翌年の二七年の五月にメーデー事件が発生しております。実はその年は、メーデーに宮城前広場を使つてはいけないということが発令された最初の年だったと記憶しています。それで、全学連がそれに抗議をするということで、他の会場から宮城前広場になだれ込みまして、警察との大乱闘になったのでした。その前夜はメーデー前夜祭ということで、お堀端に止めてあつた乗用車が片っ端からひっくり返され、火を付けられて炎上したという事件も起つておりまして、それも全学連の仕業ということになりました。当時の全学連の委員長は、天皇事件で学中の八名の中の一人で玉井君といい、確か山形高校出身であつたと思います。その玉井君はメーデー事件のため警視庁の指名手配になりました、後に京

大は放学になりました。これはその頃伝え聞いた一寸作り話のようで、確かな話ではないので参考までに申し上げます。当時北海道大学でも白鳥事件なる事件がありました。名前だけは御記憶の方もおありと思います。これは白鳥という刑事が、北海道大学の学生に殺されたという事件だったと記憶しています。これを白鳥事件として捜査しておった警察当局が、その犯人として捕まえた学生を尋問したところ、自分は別人だと主張、教授に会わせても北海道大学の学生ではない、親に見せるとうちの息子ではないということから、誤認逮捕ということで釈放されました。すると、その釈放された本人がまた警察署に顔を出しまして、私は京都大学の玉井だ、誤認逮捕はけしからんと言って再び姿を消したという話がその後聞こえてきました。或は本当かもしれないと思いますし、ためにする噂かもしれないとも思いましたけれど、玉井君はその後復学もできず、警察に捕まることもなく過ぎたように聞いております。

停学処分解除

こうして身のまわりに色んな事件の発生をみながら五月まで過ぎしました。折しも京大の服部総長から、私が勤めている建築会社に、社長の色んな思いやりを非常に喜んでいるという手紙が参りました。今ここにその手紙の実物を持ってきましたが、これは服部

総長の直筆で御座います。辛抱すれば吉報もあるとも書かれてあり、このお手紙を頂戴して間もない頃、二七年五月十三日に停学解除になりました。早速に総長のところに参りました。停学中は何をしておったと聞かれまして、先ず最初は歌を歌っておりました、そしてその後は東京へ行つて勤めておりましたと応じました。お前は歌を歌うのかと仰有るのを受けて、歌は大好きです、お許しあればここで一声上げてとも言いますと、じゃあ歌ってみろとなりました。京大の総長室で独唱したとは後にも先にも私一人だと思っております。その総長室には、三高の大先輩の須田国太郎画伯（大2・一丙）の唯一の戦争を画いた絵だそうです、生徒出陣の大きな絵が壁一杯に掲げてありまして、それが強く印象に残っております。それから十何年後の学園騒動で、安田講堂程のことはなかったようですが、総長室が占拠され、その絵が持出されて暫く行方不明になっていたそうです。その後無事に帰ったと聞いております。過去を振り返りますと、天皇事件ではいろいろ苦勞しましたけれど、そういうときに三高の友人、先輩方がまさにこれでもかこれでもかといったように援助の手を差伸べ、総長との折衝までして下さいました。今でも感謝に堪えない次第で御座います。

このようにして復学したのですが、実は総長が田舎へ行かれた時総長と村長の間に一つの約束事が御座いました。倉野の家庭が非常に厳しい、停学中はアルバイトをやっている

からいいとしても、学校へ戻ってから格別に苦しいだろうから、学校へ戻った以後の授業料について免除の嘆願書を寄こして欲しい。その嘆願書は、このような窮状を述べた村長の親書にしてもらいたい、と言って行かれたのです。停学解除になりました時にはその親書は到着しておりました。ですから、総長はそれを見せて村長からこういうものが来ているから、お前の授業料は卒業するまで免除するとはっきり事務局長のおられる前で言っておきました。こんな経緯で私は京大在学中授業料を払ったのは停学中だけだったと、時々笑い話に言っているのです。

卒業そして就職

総長からは、就職については恐らく色んな問題が起るであろうが、電気工学教室の教室主任と一緒に頑張ってせいぜい協力してやるということで御座いました。私は半年間学校に出いていなかったので、当然卒業は一年は延びると覚悟していました。ところが、それが一年延ばさずに九月に卒業しろということになりました。厄介者は早く卒業させた方が良くということだったのかもしれませんが。既に単位は他の人達と同じように三月には取得済でしたが、日数不足は如何ともしがたくて、半年延して九月に卒業しました。当時の工学部長は亀井三郎さん（大6・二甲）でした。息子さんも確か三高OBと思います。その息子さ

んとたまたま飲み屋で出会い、卒業時期の件で工学部長宅を訪ねると言いました。ご子息よりこの話を耳にした工学部長から自宅には来ないでくれとの連絡があり、大学の工学部事務所で会いました。中途卒業では就職に不利だからそれはしないで欲しいと申し上げます。たら、亀井さんとしては、みんなと一緒に卒業するときの方が不利だという仰り方で、半年早めて卒業するということは一人で一番に卒業するのだから有利だと変な理屈をこねられました。このとき、あくまでも固辞したところ、女性の事務員が学部長の使いとして九月付の卒業証書を下宿まで届けに来て、無理矢理に「一番」で卒業させられました。その時の電気工学教室の教室主任は、後年九十幾つの長命で亡くられました松田長三郎先生（大03二甲）で、その方が私のことを非常に心配して下さいました。松田先生が偶々エジソン記念日に、NHKで対談を、当時はテレビは御座いませんでしたからラジオ対談をなさいました。その相手が当時の近畿電気工事の社長だったのです。その対談の前後の休憩時間に控室で、こういう学生が一人これから就職先を探さなければならんのですが、社長何とかありませんか。と言われたら、相手の佐藤社長は二つ返事で、うちへ寄越してみなさいということになりました。松田教授が社長に、この男はこういう経歴だから、三日続くか三ヶ月続くか三年続くか三十年続くか分からないけれども面倒みてくれと言われたそうです。面接に参りまして数人の重役の方による面接の結果、正式採用ではなくて試備、

試みに雇ってみようということ、これが私が今の会社に入るきっかけになりました。会社へ入って二十年経った時に、既に相談役になっておられた元社長のところに、二十年の節目の挨拶に参りまして非常に喜んで頂いたことがありました。もう一方の総長、医学部の名誉教授でしたが、白川の方のお宅へも、会社へ入って二十年目の挨拶に参りました。玄関で出迎えて下さって久しぶりだなよく来てくれた、ところで君は何科だったかな、そこまではいいのですが、内科だったか外科だったかと言われましても、いや違います工学部の電気工学科ですと申上げましたら、暫く考えてああそうだということ、ようやく思い出して下さって座敷に上げて頂きました。奥さんも呼ばれて、もし今あのような処分をしたら私は殺されておったかもしれないあと、しみじみ仰有いました。といいますのは、私の処分はこのような形で過ぎたのですが、就職して間もなく一九六〇年代には安保闘争があり、それから数年経ってから東大紛争が始まるといった具合に、学生運動は激化して行きました。

東大紛争の起こりは、私も東大紛争に直接かかわった人に聞いたわけではないのですが、洩れ承りますと医学部から起ったらしいのです。医学部で或争議があつて、一人の学生が退学になりました。停学ではなく退学になったのです。丁度そのとき、その学生は現場にいなかった、田舎に帰っておったということが分りまして、騒ぎ出した。ところが東大は

それを受け入れなかったということ、それがだんだんもめにもめて全学生の闘争になり、安田講堂が占拠されるまでに争議が発展した。東大がやるのなら我も我もということ、全国に争議が広まって、その頃京大も何かの問題が起って争議に入っていた。当時電気工学教室の先生が心労の余り亡くなれたという話も聞いております。そんなことで、学生も簡単に処分できない時代になった、今だったら殺されたかも知れないなど、元総長がしみじみと仰有ったことが印象に残っております。

とんだ災難

復学した翌年の十一月、京都大学には十一月祭というのがあるのですが、そのとき運が悪くといえど運が悪いのですけれども、とんだ災難にありました。当時、私はコーラスで活躍しており、十一月祭の行事でモーツァルトのオペラ「魔笛」を上演することになり、その練習に励んでおりました。その十一月祭の頃偶々、全国大学戦災復興会議、多分そういう名称だったと思うのですが、全国の大学の学生の代表が立命館大学、現在は郊外に移転しておりますけれども当時は府立医大の近くにありました、その講堂に集って文化祭をやっていました。その文化祭に京都大学の男声合唱団も賛助出演をしようということで、夕方練習が済んでからそこへ向いました。荒神橋を渡ったわけですが、渡りながらふと氣

が付きますと、橋の欄干が壊れています。何かあったのかなと訝りながら立命館大学に到着しました。意外にも会場は荒れに荒れて文化祭どころではありません。話を聞いて事情が段々分ったのですが、京大の学生がそこへ出席するために、小集団で荒神橋を渡って行った時に、それを察知した警察署、川端警察署と向う側は中立売警察署らしいのですが、無届けデモとみたものか、両方から学生を挟み撃ちにして激しく揉みあつて欄干が壊れ、鴨川に転落して怪我をした学生が可成りあり、入院した者もありました。そういう学生をそのままにして、この大会を続けることはできないという騒ぎでした。当時は府警ではなくて自治体警察の市警でしたが、市警本部へ抗議に行こうではないかと衆議一決、みんな出て行きました。私共は出演の後でコンパをやる予定で、確か三高の同窓会の方から分けて頂いた二合瓶かなんかを鞆に一杯詰めて持っておりまして。大会が中止になったので、私達の仲間もその鞆をぶら下げて、みんなの一番後について行きました。市警本部の前に集まりましたら、その途端に隠れていた大勢の警官に後から襲撃され、後頭部をしたたか殴られました。眼鏡は吹っ飛び血だらけになって人事不省に陥り、気が付いたときにはみんな散り散りになって逃げた後で、側に一人の女子学生が倒れていました。これを何とか助け上げて百万辺にあったミリオンという喫茶店まで運び、そこで夜中近くまで介抱を受けた記憶が御座います。

実は明くる日の文化祭に、モーツァルトのオペラ「魔笛」を演奏会形式で演奏する予定で、出演する役も決っていました。けれども、鉢巻のように包帯をしていて出演できる状態ではありません。仲間が、市警本部へ行つて、後頭部を殴るなんてけしからんという申入れをしようじゃないかと言いだし、市警本部を訪ねました。今度は警邏部長なる人が、それは申訳ないことをした、警棒はそんな風に使うものではないと言つて頭を下げて詫びられました。その警邏部長とは、後年不思議な因縁につながるようになります。停学解除後は自治会とは何も関係無いのですが、こんな学生生活を送りました。

ところで私、先程お話したように、東京に最初に赴任したのが昭和四八年で御座いました、その前名古屋支社に二十年間勤めておりました。その頃、名古屋で寮歌祭があります度に鈴木常夫さんが見えました。私が食事していますと向うからある方が見えまして、お前はちつとも挨拶に来ないがどうしたんだと言われ、知らない人ですから何方ですかと尋ねましたら、よく顔を見てお前は違うと言われました。そこへ鈴木さんが来られ、鈴木が二人おるということになりました。これが人違いの始りで東京へ来ました時も、恐らく十八日会の方か三日会の方だったと思うのですが、何方だったか覚えていないのですけれども、始めての方に随分話込まれまして、相槌を打っておりましたらそこへ、鈴木さんが上がつて来られて、あつ別人だったかと言われた記憶も御座います。その頃私もよく太つ

ておりまして、百キロ近くありました。鈴木さんも太っておられたのでよく間違えられました。何時の間にかもう面倒くさいから私を弟ということにされ、時々弟ですと紹介して頂きました。それから数年経ってから広島支社に転勤する時に、ある先輩にご馳走になりながら、お前は どうして養子に行ったのだと尋ねられたこともあります。

その頃柔道部の先輩に山本さん（山本弘、昭15・文丙、昭58・12・05逝去）という方がおられ、顔のいかつい方で「権兵衛」さんというあだ名で、当時は水資源事業団の理事でしたが、その前は警察庁におられたそうです。その山本「権兵衛」さんに渋谷の或る料理屋で送別会をやって頂きました。確かキングレコードの和田さんと一緒にした。その時に「権兵衛」さんが仰有るには、君のことは学生時代のことから今に至るまで全部知っている、会社へ入ってから行動もよく知っていると云われました。どうして御存知ですかと言いましたら、あの問題の時に自分は京都市警本部におったということで、後頭部を殴られて抗議に行ったということまで覚えておられました。当時の警邏部長が「権兵衛」さんであつたらしいのです。だから警察というところはなかなか怖いところだなということを、事件から三十年も経って、改めてしみじみと思ったのでした。

京都大学では戦前は河上事件というのもあったようですし、大正年間に学校側に無断で特高警察が入っていったって学生を検挙して行ったという事件があり、学校の方から抗議を申込んで、内閣の方でもそれを警察署の行過ぎだということを言われた事件もあったということも聞いております。その後京大連事件があり、治安維持法も発令されました、大正十四年のことだそうです。その後も検挙が続いたということを知っています。丁度その頃、昭和初年の頃のことを、三高を一九三二年に中退された土屋さんという方が、岩波新書の「紅萌ゆる 昭和初年の青春」に、三高の寮からも大分検挙が出たということを詳しく書いておられます。

それから更に下って昭和八年一八三三年には、有名な京大の滝川事件が御座いました。滝川教授の刑法読本が、時の文部大臣鳩山一郎に見咎められて退職を要請され、これを総長が拒否した。更に内閣がそれを承認させて休職させたところが、末川さん、恒藤さん、佐々木さん等有名教授八人がこぞって辞表を出し、更に助教授やら助手、副手まで八人が退職して、京大の法学部は壊滅状態になったということです。そういった下地が戦後も少しぐらい同学会に残っておったのではないか、学生と衝突する程までして天皇をお迎えすることに於いて、他に取るべき方法は無かったかどうか、今に至ってそんな思いが致します。

こうして学生運動、大学紛争というようなことを歴史的にずっと見てみますと、滝川事件から後の京大の事件として、「天皇事件」は記録から全く欠落しております。その当時学校におった当事者でさえもその印象は薄れています。八名が無期停学になるというのは大変な事件で全国が騒いだ事件には違いないのですけれども、それが欠落していきなり東大事件、東大紛争に歴史は飛んで行っているというような、そういう印象を受けます。八人も学生が計り知れぬ苦勞した事件であつたものだと思います。しかし、私にとりましてはあのようなことがありましたお陰で三高の友人や先輩方の温情に触れることもでき、当時の総長にまで御厚情を頂きました。また、卒業してからは山本「権兵衛」さんその他多くの方々にも目を掛けて頂きました、そうしたことが重く大きく感じられて、今日では非常に感謝しております。まかり間違えば生涯を誤りかねない大事件であつただけに、多くの先輩、友人に導いて頂いたことの有難さを肝に銘じております。

私が入った会社は、入社するまで名前も知らなかった小さな会社で、関西電力の仕事を中心にやっている存在でした。しかし時と所を得て次第に成長しました。例えば私が名古屋に居ました時に伊勢湾台風にあいましたが、その時には一ヶ月間不眠不休で名古屋市内の復旧を推進致しました。また、二年前の神戸大震災の時には、会社にとって地元でも御座いますので、社会に対し重大責務を担う会社として、すぐさま四千人員体制を敷き一週

間で県下の配電設備仮復旧させました。今でも神戸周辺の方々には、私共の会社のお陰であると感謝して頂いております。最近東京では、有楽町近くの国際フォーラム、新宿の国立第二劇場をはじめ、数多くのビル等の電気設備を手掛けております。また国内全域はもとより、海外にも多くの実績を有しております。このような会社に在職し、社会に貢献できたことを私は非常に名誉と感じ、有難いと思っております。一筋にこの会社に勤めまして四十余年、最初に安部さんが仰有いましたように、昨日新聞発表がありまして副社長を退くことになりました。沢山の先輩方のお引立てのお陰で責務を全うできたと思っております。この七月になれば退任致しますけれども、今暫く一年か二年は特別顧問として東京の方におりますので、今後とも宜しくお引立ての程お願い致します。長時間とりとめのない身の上話をお聞き頂き恐縮しております。

Q 天皇家と同窓会の関係は？

A 天皇家と同窓会の間に直接の関係は無い。天皇家をお迎えしろという大学側の掲示によって、学生は日時、場所については知っていた。そして、人気スターを目近に見たいという気持ちで集った。つまり、天皇家は京大学生にとってはそれ程珍しい「人気スター」であったようだ。この群集心理の火に油を注いだのはマスコミだったと思う。その

マスコミと世論に対して、大学側は中央執行委員をスケープゴートにすることで格好をつけた。そのことが、同学会を解散させ、八名の学生を処分することになった。

Q 正確な事件と正論を述べた新聞記事はなかったのですか。

A 私の記憶では、産経新聞にそういうことを取上げて書いたがありました。今日お持ちしたいと思って探したのですが見付からなかったので、その騒動の翌日の事件の記事だけコピーして来ましたので、参考にお返し下さい。

Q 停学処分とその解除の状況は？

A (当時の学内掲示板に貼出された無期停学者発表の実物を示して)

いささか生々しい話で恐縮ですが、これが当時友達が掲示板からめくってくれました無期停学の掲示板です。そして半年後に解除になりましたのは六人なんです。一人は全学連の委員長で、退学、一人は京都でメーデーの時に何かやったということで、遅れて解除になりました。当時の紙ですのでさわるとぼろぼろになりますのでご注意ください

Q 滝川幸辰(明45・一丙)さんが総長になられてから

A 服部さんの次が滝川さんで、私が卒業した時の総長は滝川さんでした。卒業する前年、卒業式のときに「ただ酒は飲むな」というお話があったことを覚えております。その後、学生に取囲まれて肋骨を折るような大怪我をされた事件があました。それでもそれを押

してアテネの学会に行かれたとのことでした。

それから、一寸付け加えたいことですけれども、昭和二六年四月一日に天皇が東大に行幸されたとき、東大病院が空っぽになったらしいのです。中学、高校とも私の一年後輩で三高の文科から東大の法学部に入って、もう一年で卒業するという者がいました。後藤君というのですけれども、四月一日カルモチンを飲み過ぎて向丘寮で寝ていたらしいのです。それが見付け出されたのが昼で、東大病院に担ぎ込まれたが医者が空っぽで夕方まで放置され、天皇ご臨席の式典が終ってお帰りになってから、医者が戻って来て診たときには、手遅れで亡くなったという事件があったのです。天皇のお姿を拝することは京大では珍しかったけれど、東大ではさして珍しいことではなかったようです。にも拘らず、こんなことがあった。天皇にまつわる一つの痛ましい事件として記憶しています。

なお、「東大紛争」については

『1億人の昭和史』毎日新聞社刊（写真が主体の冊子）全15冊の中 第8冊「日本株式会社」の功罪」（昭和51年9月1日発行）に山根至二氏（昭22理、昭26東大医卒）の書かれた巻末の記事「東大紛争の底流、甘えとおごりの不毛時代」に詳しい

へひとり言後記

事件と母

「復学」した頃、服部総長から母のことを聞いた。「立派なお母さんだ。会って良かったよ」。明治に生まれた田舎の貧乏百姓育ちの母。文字通り目の一丁字も持たない「老女」を評する京大総長の表現には驚いた。総長が村を訪ねられた時、初対面の母が丁寧なお礼を申し述べたうえで、「私は息子を信じている」とのみ言って、その辛さについての泣き言めいたことは一切無かったとのことであつた。「大事件」の渦中にあり、極悪とみられている子の母。近隣や村人の非難の目の直中ただなかにありながらの言であつたため、総長の胸を打つたとの話であつた。

しかし、本当の母の心情はそのようなものではなかつたらしい。周囲の厳しい批判にくずおれてしまえば、我が子は完全に抹殺されるかもしれない。自分一人だけでも、彼を信じてやらねばと必死の思いでふんばっていたものであつた。既に日本育英会からも奨学金停止の処置とともに、「厳しい指導を要請する」旨の通達を受けていた。思いがけないショックで身も心もさいなまれ尽くしていたに違いない。

そこへ、総長の来訪である。通常なら話を交わすことはおろか、対面することさえ思いも及ばぬ存在のお方である。縮み上がり消え入りそうな氣持を渾身の力で支えながら、対

面に及んだものらしい。こうして「信じている」の一言が吐かれた。と私は想像している。その後も二度ばかり京都の服部総長を訪ねて、お札の言上旁々、息子の近況報告をしたらしい。いつも控えめで目立つことのない、貧しい「無学」の女とのみ見ていた母のイメージからはとうてい考えられない行動であった。田舎の老女と名だたる京大総長と向かい合つての会話はどのようなものであつたろうか。復学後、折々総長に呼ばれて母のその後の様子を尋ねられたが、その時の先生のおだやかな表情は今も忘れられない。

「荒神橋事件」の後、私は京大文化祭でオペラ「魔笛」の演奏会場の客席にいた。頭に包帯の姿である。突然うしろの席から女性の声。「来てみたら失つ張りこんな格好で……」振り返るとそこに母の顔があつたのに驚いた。何となく胸騒ぎがして、夢事で駆けつけたという。此の時は、一目見たからもういいと、一片の苦言も述べずに、遠い道のりを引き返して行つた。

漸く私は卒業して、待望？の就職を遂げた。初給料を母に呈上した。それを旅費に彼女は初孫（姉の子）を見るとて上京した。その東京でたまたま直腸がんが発見された。直ちに、入院手続きとなり、姉妹たちが全員集まつた。併し、私は折しも送電線工事のため関西の山中に在つた。母は手術室に入る直前まで私の到着を待ち続ける言葉を繰り返したと聞く。未練を残しつつ手術室に入った母はその部屋から遂に生きて還ることはなく、あつ

けなく五六年の生涯を閉じた。父が逝って十年、苦勞の連続の日々を耐えつつ私の学生時代を支えてくれた母は何一つ報えぬままに逝った。今日の私は母の年齢をはるかに越えた。学生時代に思いもかけず遭遇した事件による苦難を思うとき、その私の苦痛以上に苦しみ、悩み、それに耐えた人があつたと痛感している。それは言うまでもなく母そのひとである。手術室に入るとき、待ち続けていたが現れなかつた息子のことを、それでも「信じ」てくれたであろうか。今はそれを確かめる術はない。

犠牲者のその後

青木執行委員長は、真摯な学究の徒で、既に大学院への道を決めていた。信望厚く、所謂革命者の学生運動家ではなかつた。

玉井委員は、当時「全学連」の委員長でもあつた。京大から委員長をという巡り合せによるものであり、本人の積極性のためではなかつたと聞く。若し、彼が同学会の委員でなかつたら、全学連委員長への就任はなかつた筈。

他の委員達についての消息は、当時もその後も殆ど知らない。夫々に懸命に学生生活を送るなかで、中には積極的に「平和」を標榜し、純な活躍に身を挺した者もあるかも知れない。しかし、紛れもなくまっとうな学生であつた。因つて、学内の選挙による「代議

員」となり、更に中央執行委員に選任された。夫々はその任を果す努力をしながら、日々の受講に、研究にと精を出していたし、卒業後の目標も確かにしつつあった。恰もその時、「天皇事件」が起り、その「騒乱」の責任者、過激な運動家と看做され、その烙印が押されて全員「追放」の憂き目にあった。その影響は一時的なもので終らず、復元は困難を極めた。各人が抱いていた目標、理想、夢は永久に取戻せなかったのではないだろうか。

青木は卒業後は大学院ではなく、教職員組合に職を得たと聞いた。彼の求めていた道ではなかった筈である。

玉井は停学中に起ったメーデー、宮城前の騒乱事件当時、全学連委員長であったため、当局から手配される身となり、そのため遂に復学できなかった。生家から出て他家を継ぐことになった噂を聞いたのは、つい最近のことである。

同苦の一人、小畑は停学中に京都のメーデーに参加したため、謹慎中に京都でメーデーに参加したため謹慎中にも拘らずということで、他の六名と同時に復学できず、遅れて解除された。その後の生きざまは険しかったと思うが、今も「原爆展」開催の頃的情熱を失わず、核兵器廃絶の声を強め続けているようである。

他の委員の消息は知らない。みんな一途に誠実な大学生活を送っていた。自治会委員として学内の全ての仲間の学生生活の向上を願って活動した。その中で各人が持続していた

将来への夢は、一日の偶発事件によって敢なくなつたことだけは確かな事実である。

再び言う。「京大天皇事件」の結果、無実の学生が名も苛烈極まる処置を受け、各人の望みは果敢く消え、幾人かは道さえも永く閉ざされた。この一大事件は誰によっておこされたのであろうか。

その日より既に四十有余年、五十年に垂んとする今日、この事件は姿を消してしまつたように、歴史の記録の中に見当らなくなっている。既に八名の人生を取戻す術はもとより無くなっている。ならば、せめて空前の大事件を正確に掘り起し、正しい解釈を確立し、次世代に伝えて欲しいものだと思うが、これは引かれ者のつぶやきであらうか。

事実の調査もせず話したこともあり、誤った解釈や事実誤認もあらうかと、その点お詫び申し上げます。

(憐きんでん特別顧問(元副社長))